

53 海を渡った仏像（2021年5月4日）

仏像が映った写真は、どこで撮影したかお分かりになるでしょうか？日本ではありません。正解は、パリにあるチェルヌスキ美術館です。



チェルヌスキ美術館は、東洋美術を専門に扱うパリ市立の美術館です。アンリ・チェルヌスキ（1821-1896）はミラノに生まれ、1848-1849年の革命（ミラノの蜂起とローマ共和国の樹立）に参加しました。しかし、ローマ共和国が倒れたためにフランスに亡命し、銀行家として財を成した人物です。



1871年にパリ・コミュンが政府軍に鎮圧されました。友人を失ったチェルヌスキは失意の中、若き美術評論家のテオドル・デュレを伴い、1871年9月から1873年1月まで世界一周の旅に出ました。日本と中国で約5000点の美術品を蒐集し、これが美術館のコレクションの基盤となりました。1871年に日本に滞在した3か月の間に買い集めたものの一つが、高さが4メートル以上もあるこの大きな仏像です。

チェルヌスキは帰国後、コレクションを所蔵するためにモンソー公園近くにイタリア式の邸宅を建てました。チェルヌスキの死後、邸宅とコレクションはパリ市に寄贈され、1898年に美術館が開館しました。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

この仏像は、後の調査で、東京都目黒区にある蟠龍寺（ばんりゅうじ）にあった阿弥陀如来であることが分かりました。蟠龍寺副住職の吉田龍雄さんは、この仏像がフランスに渡ってから今まで、パリ市民に愛され、大切に展示されていることはとてもありがたいことであるとおっしゃいます。

19世紀末に開国した日本は、欧米の文化や習慣を積極的に取り入れました。同時に、仏教寺院や仏像を取り壊す廃仏毀釈の動きが強くなり、多くの美術品や仏像が海外に流出しました。海を渡った美術品の多くは行方が分からなくなりましたが、蟠龍寺にあった仏像は、チェルヌスキのおかげで廃仏毀釈の難を逃れ、今でも私たちが目にすることができます。

チェルヌスキが日本でこの仏像と出会ったときに、なぜこの大きな仏像をフランスへ持ち帰ろうと思ったのでしょうか。阿弥陀如来の穏やかな表情に惹かれたのかもしれませんが。もしチェルヌスキと話ができるなら、彼がこの仏像を見て何を思ったのか聞いてみたいです。



© 蟠龍寺/Le Banryu-ji



© 蟠龍寺/Le Banryu-ji